

経済・金融
フラッシュロシア GDP(2023年10-12月期)
— 内需の強さが継続、高成長を維持

経済研究部 主任研究員 高山 武士

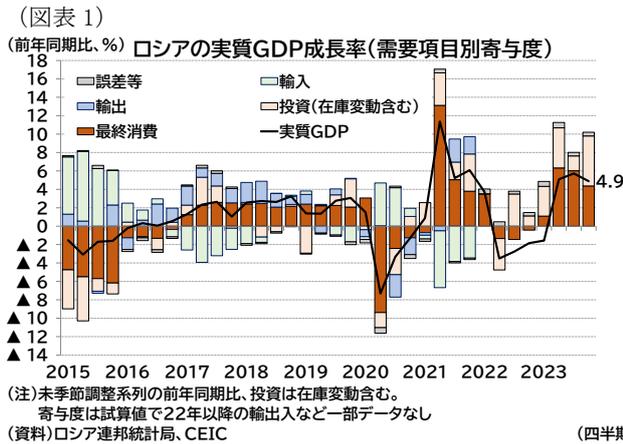
TEL:03-3512-1818 E-mail: takayama@nli-research.co.jp

1. 結果の概要: 前年比伸び率は低下したが、高い伸び率を維持

12月13日、ロシア連邦統計局は国内総生産（GDP）を公表し、結果は以下の通りとなった。

【実質GDP成長率（未季節調整系列）】

- ・2023年10-12月期の前年同期比伸び率は4.9%、予想¹（同5.3%）を上回り、前期（同5.7%）から低下した（図表1・2）



2. 結果の詳細: 内需の強さが目立つ

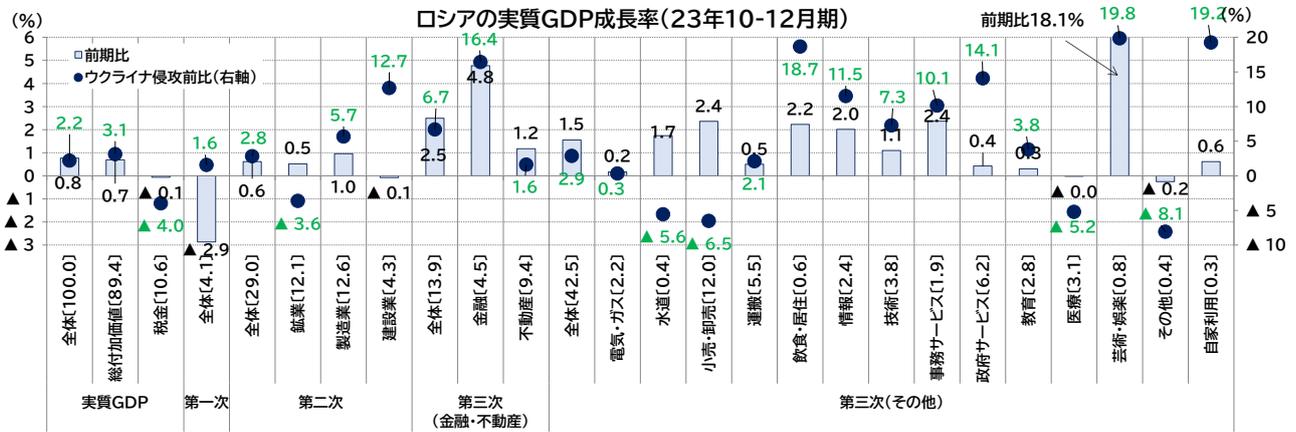
ロシアの23年10-12月期の実質GDP伸び率は前年比4.9%となり、7-9月期（同5.7%）より低下したものの、昨年、ウクライナ侵攻後の落ち込みからの反動効果（ベース効果）もあり、高めの伸び率を維持した。季節調整系列の前期比は0.8%（年率換算3.1%）で、7-9月期（同0.9%、年率換算3.5%）とほぼ同水準の伸び率を記録した。また、過去データの改定により、ウクライナ侵攻後のGDP水準が総じて上方修正され、戦争前（21年10-12月期）と比較した水準は2.2%となった。23年暦年の前年比伸び率は3.6%で四半期別のGDP公表に先立って2月7日に公表された暦年数値の伸び率から変更はなかった。

産業別の伸び率は、前年比で第一次産業が▲4.9%、第二次産業が3.2%、第三次産業（金融・不動産）が4.7%、第三次産業（その他）が6.9%だった。前期比では第一次産業が▲2.9%、第二次産業が0.6%、第三次産業（金融・不動産）が2.5%、第三次産業（その他）が1.5%となり、第一

¹ bloomberg 集計の中央値。以下の予想値も同様。

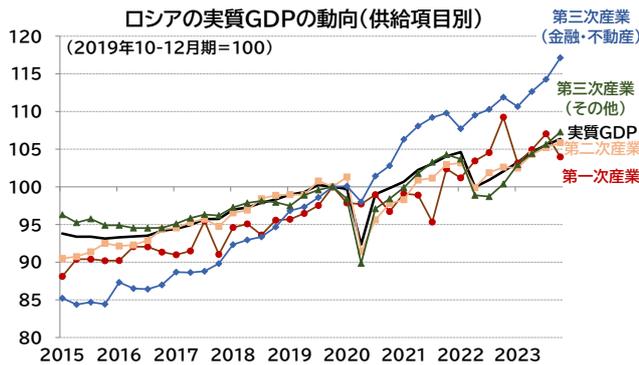
次産業はマイナスとなったが、第二次産業・第三次産業が高めの成長で全体の伸びをけん引した(図表3)。より細かい産業の伸び率は、建設業(▲0.1%)、その他サービス(▲0.2%)、医療サービス(▲0.0%)はマイナスだったが、芸術・娯楽サービス(18.1%)、金融サービス(4.8%)、事務サービス(2.4%)が高い伸びを記録している(図表3)。

(図表3)



(注)□は2020年の実質GDP全体に対するウェイト、産業分類伸び率およびウェイトは筆者による試算、ウクライナ侵攻前比は21年10-12月期との比較
(資料)ロシア連邦統計局のデータをCEICより取得

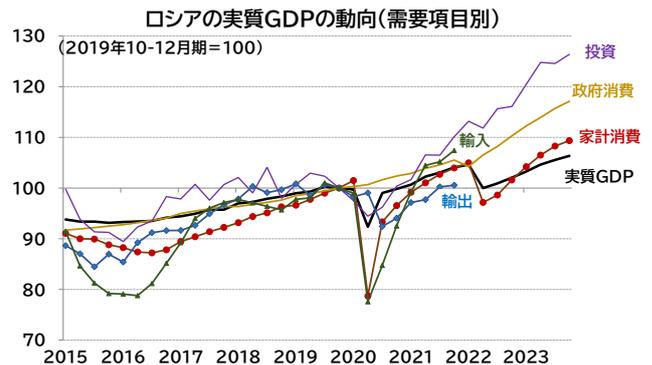
(図表4)



(注)季節調整系列の19年10-12月期を100として指数化
(資料)ロシア連邦統計局のデータをCEICより取得

(四半期)

(図表5)



(注)季節調整系列の19年10-12月期を100として指数化、22年以降の輸出入のデータなし
(資料)ロシア連邦統計局のデータをCEICより取得

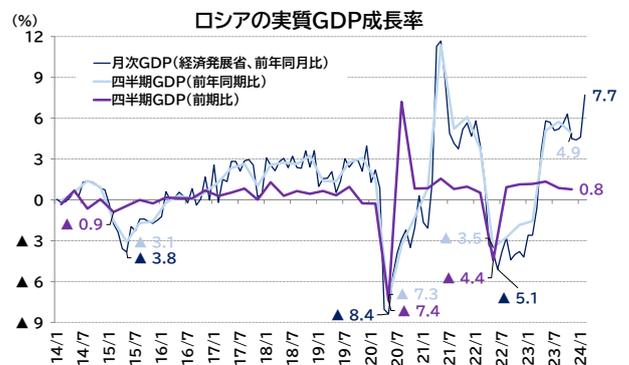
(四半期)

成長率を需要項目別に見ると、前年比伸び率では家計消費が7.3%、投資が8.1%、前期比伸び率では家計消費が1.0%、投資1.4%であり、内需の強さが目立つ(図表5)。実質輸出入のデータは公表されていないが、純輸出寄与度を逆算すると、前年比寄与度で▲5.3%ポイント(7-9月期は▲2.3%ポイント)で6四半期連続のマイナスとなっているため、輸入の伸びが輸出の伸びを上回った状態が続いていると見られる。

10-12月期の名目成長率は前年比19.5%(7-9月期は16.3%)となった。GDPデフレーター伸び率は前年比13.9%と、7-9月期(10.0%)から加速、インフレ圧力の強さが反映された結果となった。

なお、24年以降の動向を経済発展省が公表する月次のGDP成長率(前年比)から確認すると、24年1月は4.6%、2月は7.7%となり、ベース効果の押し上げ要因を考慮しても、かなり強い数値となっている(図表6)。

(図表6)



(注)月次GDPは経済発展省の推計値
(資料)CEIC

(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保證するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。